いしかり潛

石狩座について……青木　隆…1

イシカリと風……田中　實…3

除虫菊について……金子　仲久…10

早坂文雄をしのぶ……前川　道寛…20

特別寄稿

一九四五年七月十五日石狩空襲の思い出……中村　秋雄…25

第　7　号

石狩町郷土研究会

1988, 9月

石狩座について

青木　隆

石狩の本町市街で育った私が幼い頃のいろいろな想い出のなかのひとつに、今はもうなくなりましたが土地の人々から芝居小屋と親しまれ呼称された石狩座で、活動写真を見て、そして終ってから同行した家族や、またときには近所のともだちと、その夜に見た感想を興奮のさめやらぬまゝに、大きな声で話し合いながら、当時、街路灯などなくて、ずい分暗く感じた夜道を急ぎ足で帰宅し、途中で道路穴の水たまりが見えなくて足をぬらしてしまったことや、放し飼いの犬にほえられたりしたことなども、あわせて憶い浮び、おおむね五十年以上経過した、こんにちも、たいへんなつかしくよみがえります。

石狩座のあった場所は石狩左岸市街の大字本町の通りで、現在、砂丘に立つ観光展望台から約一〇〇米位、南東（石狩川に寄った所）の町内の寺院の中で一番古くからあると伝えられる法性寺のすぐ前にありました。

石狩座がいつごろから、どのようにできたのかなどを知るのに、当時の経営者の故渡辺吉三郎氏の長男、渡辺不二夫氏やその弟さんの渡辺吉昭氏にの聞きしたところによれば、おおむね大正十一年か十二年頃に森田さんという人が漁業用の倉庫か番屋のような建物を大きく改造し、芝居小屋風にして始めの名称は森田座と呼ばれたといいます。その後昭和五、六年頃と記憶されているのですが渡辺吉三郎さんに経営が移って名称も石狩座と改まったそうです。

さらに渡辺不二夫さんの語られるところによると、「その頃、森田さんの〝鷹の羽ちがい〟〟の家紋を白く染め抜いた紫色の幔幕が桟敷に張ってあった光景が、よく眼に浮びますね。そして石狩座に変ってからも森田さんの奥さんや、芹田さんという女のひとも、よく掃除などの手伝いにきてくれましたね……

昭和の始め頃は、映画もまだ少くて芝居や漫才、浪曲、民謡、人形芝居といった、いろいろな催しが巡回してきて、石狩座で興行された翌日は右岸の八幡町市街で宝楽座（後年、宝楽館と改称された）で行われ、その翌日には厚田村方面に廻るというように、事前に先乗りの人が訪れて日程を決めてゆく仕組になっており、それによって地元石狩の警察署に届出をして許可をもらっておくことに定められていたのですが、戦前には石狩座の場合は一ヶ月間に五日より興行許可にならなかったのです。

そして毎回興行のあるたびに、風紀を取締ったり、警備等も兼ねて、警察官が臨検にきておりまして、入口から履物をぬいで中に入るとすぐ左側のところに、その臨検員の席が周囲を仕切って前方の舞台や客席のようすがよく見れるように設けられておりました。

上映や上演は、殆んど夜に一回の興行でした。舞台は芝居の幕合いを短縮させるために廻り舞台の仕組みがあり、舞台下で数人の手により割合い容易に回転できるようになってましたけれど、私の気憶では実際にあまり使用されなかったようでした。以前の森田座のころには多く使用されていたのかも知れません。正面に向って左側に細長く花道の部分が板敷で設けられ舞台に通じておりました。観客の席は板敷きの床にゴザを敷き、両側に桟敷があって、その上と舞台の真正面の部分との三方が二階席になってましたが警察官の席以外は椅子でなくて、座布団を敷いたり、直接ゴザに座ったりしましたが、特別な催しで超満員の場合は五百人位も入ったのでしょうかねえ……活動写真が始まった昭和初期は無声映画だったから、必ず〝弁士〟と〝楽団〟が同行してきており、舞台幕の横の部分に弁士の席があり、手元の小さい照明で台本をみながら、映写される画面に合せて、セリフを老若男女それぞれに、たくみに演じると同時に数人の楽団が高く、低く音楽をかなでるので、なかなか盛り上り、観客もこれにつられて涙を流したり、興奮したりで、クライマックスには観客から一斉に拍手がわくという具合でした。その頃というのは娯楽の面でも現在とは比べられない程、少なかったもので例えばラジオだって聞ける家庭のほうが少なかったと思うし、新聞や雑誌の購買も今では考えられない程わずかであったので、それだけに活動写真や芝居その他の催しものは、その頃の町民には魅力があったし人気もたかかったのでしょうね。その外、戦前からずっと町には公民館的な施設がなかったため、ときには選挙の演説会場になったり、地元の青年たちの歌謡や踊りの演芸会とか、戦時中だったけれど消防団のひとたちなどの演劇等にも使われて、ずい分多くの観客が入ったことや、特に変ったことでは昭和のごく初期ですが大相撲が巡行してきて石狩座で仮設の土俵を設けて興行をしたときの、力士を含めて、たくさん関係者がきたことなどの記憶も残ってますよ……」とこのようにお聞きしながら私も懐かしいことが憶い浮びました。

たしか私達の小学生の低学年の頃でしたが、活動写真の上映される日には、午後から楽団が市街を演奏行進し、その行進経路は石狩座前から横町通りを進み、小学校前から親船町の通りに出て北に向い、途中で座主の渡辺吉三郎さんが市街の主な十字路に立ってメガホンで、今夜上映される写真の題名や主演俳優などの被露を行うのでした。

この楽団の演奏される音がきこえてくると子供たちは何をやっていてもやめて、走って見にゆき、ときには、ぞろぞろとついて歩き、最後には㊥塩原旅館の道路に面した窓にその日の活動写真のスチール写真が何十枚も張り出されているのを見るのに、ずい分おおぜいの子供等が集まってとても、にぎやかだったものでした。

その後、数年経ってトーキー映画の時代に入り、大河内伝次郎の丹下左膳などがその初期のものであったように記憶してます。

サムライのチャンバラ映画は、もちろん子供に人気があったけれど漫画のポパイとか、若干おくれたニュース映画も喜ばれました。

このように石狩座が文字通り唯一の文化施設として町民に永い間親しまれたのでしたが、戦後のテレビ放送の普及にともなって全国的な映画不況の時代になり、又石狩の場合には戦後年々交通事情がよくなり、冬季間でも娯楽を求めて札幌へ出ることが容易になったりしたため映画等の観客も減りましたし、永い歳月の間、厳しい石狩の風雪によく堪えぬいてきた石狩座も老朽化がはげしくなり、ついに昭和四十一年に、とりこわしされてその姿を消したのでした。

イシカリと風

田中　実

一　船乗りと信仰

昭和四十二年、町文化財の第一号に指定された石狩弁天社（弁天町北一八番地）は元禄七年に建てられ、漁業と宗教との深い関係を知るうえで重要な社です。

この社の拝殿正面に笏谷石（福井県産）造りのコマ犬が一対おかれています。大きさは約二十二センチメートルで、胴体にはわずかに金彩が残っており、口は赤く塗られ、眼は銀彩になっています。このコマ犬の胴体から前足にかけて、スミ書きで「庄内酒田柏屋久左衛門舟中上乃り九兵ェ　天党船」及び「酒田、秋田」と書き込まれています。

天党船とは、南部や津軽などから蝦夷地に交易にくる九十九石までの和船の呼び名です。航海技術の幼稚な時代に、小型和船で日本海の荒波を乗り切り蝦夷地と交易した船乗りが、航海の安全を祈願して奉納したもので、コマ犬に寄港地まで書き込んだものは珍しく、江戸時代後期の宗教史上からも貴重な参考品ということができましょう。

幕末になって蝦夷地と上方との交易が盛んになり、西

廻航路（にしまわりこうろ）に活躍したのが、北陸や越後の港から上方に行った廻船（かいせん）－北前船（きたまえぶねともいう）－ですが、高い帆柱に一枚の大きな帆を張り、順風をたよりの航海なので、逆風になるとさっぱり進まず、吹かないときは風待ちで日を重ねるなど苦労が多かった。北陸から小樽へは二週間が普通だったが、風の具合が悪いと一ヶ月以上もかかることもあったとのことです。

上方（大阪）を彼岸前後に出発し、瀬戸内の各地に寄港して、色々な品物を買い集めて下関から日本海に出て、佐渡、新潟及び酒田などに寄り、ニシン漁期前に函館、小樽、厚田から利尻に至るまでの港に着き、問屋の手を経て積荷をさばき、帰り荷のニシンや〆粕などの海産物を積み込み、おそくとも八月中には出発して帰路につく。これは二百十日の台風到来までに瀬戸内へ入りたいからです。まして、石狩のサケ（塩引き等）を買い取り船に満載しての出発となると、帰路の海上で台風や強い低気圧通過による荒波に遭う機会も多くなるだけに、神仏頼みも一しお深かったのは当然ともいえるだろう。

石狩弁天社の一対の小さなコマ犬は、無事に石狩湊に到着したお礼と帰路の海上安全を祈願して奉納されたことを今に証している文化遺産の一つなのです。

（参考）　北前船の時代－近世以後の日本海運史、牧野隆信　教育社一九七九

二

(一)　漁業者と風の呼

誰もが天候に関心を持つが、漁業者の風についての関心は特別である。現在のような気象情報や天気予報の出ていなかった時代でも、長年の経験や勘で風から海上の状況などを判断してきた。そして出漁と深い関係のある風向や風力についての独特の呼び名を各地に生み出している。「板子一枚地獄の底」といわれるように、海の生活の場としている漁業者は、風についての知識（見分けかた）も身体に染みついたものであろう。

また、漁の禁忌についても数多いが、ここでは風についてだけ述べてみる。

風向と風力についての各地の呼び名を、石狩をはじめとして近隣の漁村を主として表にしてみた。各地の地形、海に向っている方向などにかかわらず大体同じであるが、風力については各地で違いが見られる。

石狩では、北風（シモゲ）は「凪の前ぶれ」。西風「ヒカタ・オキカゼ）は「冬では一週間位続いて吹き北に廻って止む」。と見る。

高島町（小樽市）では、ごく弱い北風を「アイノカゼ」「シモカゼ」と呼ぶ。

古潭村（厚田村）の漁業家　沢田末五郎氏は、「山風（ヤマセ）から彼方風（ヒカタ）に廻り、彼方風から東

風（玉風）に変ることが多い。これは低気圧の移動の関係でそうなるのだ。」

「上空の雲が西の方から東の方に移動しているのに、浜辺の風は南から吹いているという場合は低気圧の移動の速度が早い証拠だ」といっている。

厚田村沿岸では、北東風（しもげ）は、急に大波がくる。南東風（やませ）は、波がないが風が強い。南西風（ひかた）は、山風から急に彼方風に変る。北西風（たばかぜ）は、彼方風から急にたばかぜに変り、（たまかぜ）といっても波が大きい、と言っている。

このなかで一番恐ろしてのは、たば風（たまかぜ）で、古潭村の相原ツマさん、柏原文さんによると、「昭和四年十一月二十六日、厚田村嶺泊浜の沖合で鮭網の型入れをしていた二隻の磯舟の救助に向った鮭の「おこし舟」が横波を喰って横転し、浜辺の村民の目の前で全員波間に姿を消し総勢十九名のうち十八名が絶命」という惨事も、彼方風から急に変ったこの風によるものであった。

また、「昭和十二年十二月、嶺泊の鮭漁場で鮭の後取り（ごうどり）の最中、たば風によって漁船が転覆し十五名全員が死亡」している、という。

「たば風の次に恐ろしいのは急に大きな波の出る下風。また波はないが強い風の吹く山風の時は船は沖へ沖へと出されてなかなか帰って来られない。石狩では別に出し風とも言っている」と沢田氏は談っている。

(二) 詩歌に読みこまれた風の呼び名

享和元年（一八〇一）幕府蝦夷地取締御用掛筆頭松平信濃守忠明が西蝦夷地を巡視、従属の磯谷則吉の記した「蝦夷道中記」に「五月五日石狩着、風待ちて六日から十一日すぎまで石狩滞在」とあり、次の歌を詠んでいる。

松風はけふも嵐に吹かへて只いつまでか
石狩のはま

安政四年（一八五七）　五月二十八日、回浦奉行堀織部正利熙は、石狩出発に際して次の一詩をよんだ。

鯡鰊乾枯帰筐中　御神洋上舶西東
彊喧三日好天気　卜得満帆山背風

丸山道子氏意訳ー この地は今鰊がよく乾き切って箱に詰められている季節である。神威岬の沖には沢山の船が東へ西へ行きかっている。この辺境での賑かな三日間が過ぎて、今日はよい天気になった。船の帆いっぱいに順風をうけて出帆するー。

（注）石狩を出帆するのに山背風（ヤマセ風）が順風だったことが分る。ー著者）

また、堀奉行から天塩川水源までの探査を命ぜられ、同日出発した松浦武四郎は、石狩出発に際して次の一首を詠んでいる。

風の呼び名（抄）

小樽（高島）	古平（幕末）	松前（福山港）	苫小牧（寛政10年）	根室（幕末時代）
シモカゼ アイノ風	アイ	間風（アイノカゼ）	アイ	アイノ風 （アツナヲレラ）
	アイシモ		アイシモ	アイシモ風 （オチウフカンベ） 下風コチ （ラマト）
ヤマセ	ヤマセ	山背風（嵐）	ヤマセ	ヤマセ （メナシ）
	ミナミヤマセ	出し風 下り風	シモ	イナサ （イカメナシ） イナサ南風 （ノテナイ）
ミナミ	クダリ	下り風	下り	クダリ （ペケレビカタ）
南ヒカダ ヒカダ 西ヒカダ	ヒカタ	若狭風（干潟風）	ヒカタ	クダリ風 （アシノビカタ） ヒカタ風 （ビカタ）
ニシ	ニシ	若狭風（干潟風）	西	ニシ風 （シュムレフ）
アイタバカゼ	タバ	タバ風	タバ風	ニシタバ風 （ヲイルシ） タバ風 （ヲベトシム）
新高島町史	古平町史　嘉平4年古平場所請負人岡田目録	北海道志	苫小牧市史 （武藤勘蔵「蝦夷日記」）	「東蝦夷夜話」 （ ）はアイヌ語

風向＼地名		石狩（昭和50年代）			厚田（昭和40年代）	浜益	浜益（茂生）（明治13年）
北	子	ヤマセ系	シモヤマセ	アイノカゼ シモカゼ シモゲ	アイ風	あい風	アイノ風
北東	牛 良 寅	ヤマセ系	シモヤマセ	良門（者？）	しもげ	しもかぜ	アイシモ風 シモゲ（下風）
東	卯	ヤマセ系	シモヤマセ	アラシ ヤマセ ダシカゼ	荒らし （出し風・玉風）	出し風	ダシカゼ アラシ
南東	辰 巳	ヤマセ系	ヤマセ	ダシカゼ クダリ ホンヤマセ	やませ	ヤマセ風	ヤマセ
南	午	ヤマセ系	ヤマセ	クダリヤマセ クダリ カミカゼ	下り	クダリ風	タダリ
南西	未 申	オキカゼ系	ヒカタ	ヒカタヤマセ ホンヤマセ	ひかた （彼方風）	ヒカダ風	ヒカタ（石狩門）
西	酉	オキカゼ系	タ	ニシ ヒカタ オキカゼ	沖風	沖風	オキカゼ
北西	戌 乾 亥	オキカゼ系	タマカゼ	ヒカタタマカゼ タンバ 寿都門（者？） ニシタンバ アイタマカゼ	東風	タバ風	タマカゼ タバカゼ 寿都門
出典等		聞き取り 宮下　定治 高橋健太郎			古澤村 沢田末五郎 （厚田村史）	浜益村史	浜益村史 浜益郡茂生村 本間商店日記

朝風（だし風）に白帆むしろ帆まき上げて
西に東に船の行く見ゆ
（注　丁巳「天塩日誌」より－著者）

子たたき唄（わく網から数の子を落すときの音頭で、イヤサカ音頭ともいう）。その歌詞の一節、
（唄い手）アーイヤサカサッサー　あいの吹くのになぜ船来ない　荷物ないのかノー船止めか
（注「鰊場音頭と共に」昭和六〇年　河崎勇より）

ソーラン節歌詞
これでとれなきゃニシンも薄情北風（あい）のあどだで群来（よせ）てくる。
昨日は北風（あい風）今日は南風（くだり風）明日は浮名のたつみ風

高島越後盆踊り歌詞
高島のお稲荷より吹き出す風は高島繁盛と吹き下ろす

三

(一)　石狩の海難事故（抄）

元禄元年（一六八八）水戸光圀が派遣した日本一の大船、快風丸（長さ約四十九メートル。巾約十六メートル。櫓の数四十挺。帆柱の高さ三十二メートル。帆木綿五百反。乗組員六十七人。造船費七千両余。船頭崎山市内）は、二月三日那珂港を出帆し六月二十七日石狩に着き、四十日ほど碇泊してアイヌ　と交易をし塩引一万本等を積んで帰航の途に着いたが、途中台風に遭って北に遠く流され難航の末に十二月二十七日那珂港へ帰港した。このことを「快風丸渉海記事」は冒頭に次のように記している。

一、辰十二月御舟韃靼島へ漂流して帰候覚書
一、今度快風丸石狩へ罷越帰船の節東風にて出船おかもひ岬より北風順の処に南風に替り九月六日暮より流れ十日の暮まで沖合に罷在其内大風大雨にて韃　の方へ百里程も流申候然共御船強候故無別儀十一日に順風に罷戌十五日迄に松前近処ゑさしと申候湊に入津仕候。

(二)

大正二年（一九一三）、樽川七線浜の海面鮭漁場で定置網起しのため海上で夜を過していた時、急速に接近した台風による高波のため船は転覆し、乗組みの漁夫は海に放り出された。船に取りつくこともできず十六名が死亡されたという。ただ一人の生存者は橋本大蔵という人で、日頃から沈着で大の強者であったという。転覆した船に何度か取り付こうとしたが大波に叩かれてかなわず九死に一生を得て着岸したが、両手の指は爪がはがれ、

肉が破れて骨が出て居ったという。八十才で亡くなられた。この漁場をのちに経営した小樽内川の渡辺精一郎氏は、亡くなった漁夫を憐れみ、砂丘の小高い場所に供養塔を建て遺族を集めてねんごろに霊を弔われた。その後この場所は豊漁が長く続いたという。（昭和六十一年発行、田中実編「たるかわの歩み」所収。米田秀司記）。

(三)

昭和八年（一九三三）六月八日、西浜の海面鱒漁場で高波のため漁船遭難六名死亡。また同日、前浜でホッキ貝ケタ網漁業中の漁夫三名死亡。

(四)

昭和二十五年（一九五〇）小樽内川の海面漁場で定置網から帰る途中の漁船が突風を受け転覆四名死亡。

(五)

このほか、明治期から最近に至るまで、石狩の沿海や石狩川河口での漁船、汽船の座礁や沈没、人命に及ぶ海難事故は少くない。

このため悲惨な海難事故のぼく滅と遭難者の救助のため、昭和十一年（一九三六）一月二十二日に帝国水難救済会石狩救難所が設立され、吉田庄助氏が初代所長に就任した。この組織は戦後名称の一部変更等があったが、今に至っており、現在の神田広次氏は五代目の所長である。

除虫菊について

金子仲久

除虫菊が始めて日本の土に根を下したのは和歌山県で明治十九年の事である。

紀州有田郡の密柑王といわれる上山英一郎氏は慶応義塾を出て郷里に帰農、殖産興業を念とし密柑園の経営に励んでいた。偶々北米合衆国サター街の米国植物会社社員が来日して紀州上山氏の柑橘園を親しく視察した際、お互ひに珍らしい植物の交換を約束し明治十九年一月、一袋の除虫菊の種が上山氏の下に到着、上山氏は周到な注意を払い播種栽培茲に除虫菊は完全に和歌山の土に根付いたのである。日本に於ける除虫菊の創始である。

之は上山氏が二十才の時の事である。但し除虫菊の製品が日本に輸入されたのはそれよりも古く、明治十四年の事である。

偶々同じ頃オーストリヤの日本領事ゲオルト・ヒューロット氏が来朝し、日本の気候風土が除虫菊栽培に適しているとして除虫菊種子に栽培書を添えて日本の農商務省に送付して来たので、農商務省は和歌山県勧業課に伝達して来た。上山氏は和歌山県下許りでなく、全国を行脚して其の有利さを説き、岡山、広島、大分、滋賀、北海道に種子を送り奨励した。

北海道に除虫菊を作付したのは私の祖父金子清一郎で明治二十五年の事である。此の事を丹野獄二氏は著書「北海道の除虫菊」に次の様な記事を載せている。

新潟県三島郡瓜生村の人で六ヶ村の戸長をしていた金子清一郎氏（明治十七年戸長を辞職）が明治二十年北海道に渡り花畔に落付いた。此の地方は河原の砂地でやせ、乾燥地で農作も思うに任せず、入地者は漸次減小の傾向にあった。そこで何か適作を見つけ地方の発展に資したいと考へていた折柄、偶々除虫菊の有利なるを説いた小冊子を手にした。之は当時既に除虫菊に着眼されて栽培の勧奨をせられた紀州上山英一郎氏の栽培小冊子であった。此の冊子は当時札幌の山鼻に居住していた山本という徳島県出身の人より貰い受けたもので、金子清一郎氏はここに着目、上山氏より僅かの種子を得て石狩街道沿いの自宅附近の畑地に之を蒔いたのである。之が明治二十五年の春で僅かに五十株許りを秋に定植したのが北海道除虫菊の嚆矢で、軽川の駅より坦々の道路は二里半呈、すぐ傍らを石狩川が流れて河畔の古柳緑濃く、郭公子がなく静寂境、そこに白花は楚々として除虫菊は咲き初めたのであった。初めは唯花を楽しむ程度であったが、その後明治三十四年石臼で粉にして蚤取粉を製造して地方に配布したりした。

やがて明治三十七年には免許を得て之を盛に売り出し爾来金子氏の蚤取粉は全道にその名を知られる様になっ

た。金子氏は自ら栽培し乍ら併せて附近の農家にも之が栽培を奨めた。そこで明治三十六年頃には此の地方の反別は一町二反呈に殖え、生産された乾花は和歌山の上山氏に送っていた。」云々と。

今茲に除虫菊に幾種類かあるので参考に記して見よう。元来除虫菊は別に駆虫菊ともいひ通称蚤取菊といわれている。菊花植物の宿根草で菊の高さは七十センチ位に達する叢生植物で夏季、白、或は淡紅色の花を開く。その性状と原産地とによって次の数種に区別せられ、更に系統を大別して白花種、赤色花種の二品種に大別せられている。

一、ダルマチヤ種ー原産地、オーストリヤ国、ダルマチヤ、モンテネグロ

一、ペルシヤ種ー産地、ペルシヤ、カウカサス、カスピアン南海岸

一、ウンガリヤ種ー産地ウンガリヤ

之等のうち、ダルマチヤ種が白花種、他は何れも紅色花種である。我国に栽培されていたものは殆どダルマチヤ種で繁殖容易であり収穫量も多く成育し易いが病害に対しては抵抗力がうすい。病害としては菌核病、根腐れ病、萎縮病、立枯病、根線虫病等がある。

此の病気の誘因となるものは気温、湿度、土質、耕種、肥料等色々の条件が重なり合って発生する。従ってその防除法も、ボルドー液、ホルマリン液、石灰の散布等その病気により使い分ける。今は除虫菊も幻の植物となって実際に栽培している所は私の知る限り北海道では皆無に近いと思われる。播種、栽培法等も他の作物と異なる手法によるのであるが其の必要もないので省略する。

除虫菊の収穫の時期は余程慎重に観察しないと経済効果に大変影響する。元来下種後三年目から収穫出来るもので、一株に五、六十から多いものは百五十位も着花する。反当収も三、四年目一〇ー二〇貫、五年目八ー十五、六貫で、以下年毎に減少する（乾花）。

摘花も早過ぎると収量も少ない。反対に遅すぎると収量は多いが品質が下落し、ピレトリンの含量も減って来る。除虫菊の花の一つを取ってよく調べて見ると花の中央部に無数の束になって立っている黄色い管の様な花がある。花が咲いてから日が経つにつれ此の管状花が外まわりの部分から咲きはじめ順々に内部に向って咲いて来る。その有様をよく見ると外側の白い花即ち花弁が開いた時にはまだ此の黄い管状は少しも開いて居ないのである。その後二、三日たつと此の管状花の周囲の部分が咲き出して来る。一番外側の白い大きな花びらが映いたのを見て満開と思うのは間違いで更に五、六日たつとその黄色い管状花は遂に真中の方迄全部開く。外側の白い花が開いてから約八ー九日経って満開という事になる。然し之では少し遅いのでまわりの舌状花（白い花弁）が開いてから三ー六日、つまり中央の管状花が五ー六分から七ー八

分咲いた所が最もよい。此の時期が有効成分の最も多く、乾花にしても重量が相当重い時である。

摘花の方法も最初の中は籠を用意し、指の間に花頭を挾んで花だけもぎ取る方法で女、子供でも容易に出来たが手間が掛かるので、その後天気のよい日に鎌で刈り取って之を千歯で扱き落す方法をとった。乾燥の方法も色々あるが、私の所では長さ三尺五寸、巾二尺五寸の透かし折（底には巾一寸八分厚さ四分長さ三尺五寸の小舞を等間隔に五枚程釘付けして前記の小舞で椽取る）に粗い菰莚を敷き之に生花を並ぶ陽乾しする。天気のよい日に一―二日で乾し上げると品質も最高で舌状花は銀色に管状花は黄金色になる。

乾上った乾花は麻袋に正味六貫詰めとし又は大きな木箱詰めとし湿気を防ぎ保管する。

明治二十五年石狩河畔、花畔の一角に白い清楚な花を開いた除虫菊は新しい作物でもあり認識不足や不安から啓蒙に努めたが遅々として作付反別増加せず、明治三十八年より十年間の作付状況、収穫は次の通りである。

年次	作付反別	収穫高	価格
明治三八年	三町二反	一六一貫	四七七円
〃 三九	一・三	一五五	三三三
〃 四〇	一・三	一二六	二六一
〃 四一	九・一	一、〇三五	二、二八五
〃 四二	一〇・一	三、二四三	五、三六八
〃 四三	一七・九	三、二七一	七、六〇〇
〃 四四	一二・七	一、八九〇	五、七〇五
〃 四五	一二・八	一、六九一	四、七〇六
大正二	一二・二	一、四四三	四、一二七
〃 三	一六・一	一、一六九	二、七一五

之を支庁別に見ると次の通りである。

大正三年	札幌支庁	六町九反	六六七貫
	空知 〃	一・七	一九五
	上川 〃	五・〇	―
	後志 〃	〇・五	四二
	檜山 〃	〇・四	五〇
	函館 〃	―	―
	室蘭 〃	一・四	一七九
	札幌区	〇・二	二六
合計		一六・一	一、一六九

一、五五〇円	五五三	二、七一五円
―	―	―
八一	六四	
―	―	―
三九九	六八	

大正四年四月札幌支庁管内の実地調査による氏名と反別は次の通りである。

町	反	歩		
二〇〇〇			札幌郡札幌村大字苗穂	山村 スミ
三、〇〇〇〇			石狩郡石狩町大字親船	江口 信近
三、〇〇〇〇			石狩郡石狩町大字花畔	金子清一郎
八〇〇〇			仝 右	内海秀太郎
一、〇〇〇〇			仝 右	宮本 正一

二〇〇〇　石狩郡石狩町大字花畔　橋本興左衛門
五〇〇〇　仝　右　米田新左衛門
一〇〇〇　仝　右　田口子之蔵
一〇〇〇　仝　右　田中　兼松
六〇〇〇　石狩町大字船場町ヤウスバ　西本　甚八
〇一二〇　浜益郡浜益村字柏木村　長内　友吉
〇〇二〇　浜益郡浜益村　川下村字毘砂別　川上　健
〇〇一五　浜益郡浜益村大字茂生　町野　角蔵

一方除虫菊の粉末にしたのが虫駒除に効くのを知って明治三十四年頃石臼で乾花を粉末にして蚤取粉を製造して地方に配ったりして喜ばれたので其の事から明治三十七年に売薬部外品として道庁の認可をとり、㊟金子清一郎ののみ取粉又は駆虫散として売出し全道にその販路を拡げたのである。

斯うしたたゆまぬ努力と奨励で徐々に作付面積が増加した。当時、岡山、広島方面が栽培最も盛んで本邦産額の三割以上を占め、四国、和歌山の諸県が之に次いで多かったが、その後大正九、十年頃より漸次減少を来たした。その原因は之等の地方は地価が比較的高く当時一反歩三百円から五百円もするので、北海道の地価の十倍にも当る。従って収量増加をはかる関係上自然多くの施肥を必要とし、本道の三倍近くの収穫があっても採算がとれない。従って除虫菊の生産高は次第に北海道に移って行った。

それはともあれ相場の変動が烈しく、商人の好餌となり生産者は税えず不安に曝されていた。本道に初めて除虫菊を栽培した祖父の金子清一郎も大正五年二月、七十五才で死亡したため、父の岩平が襲名して金子清一郎を名乗った。かねて他の作物に比較し除虫菊が不安定なのを憂慮し、大正六年に内海秀太郎、猪俣松蔵、田中兼松、宮本正一等と相談して、茲に石狩町除虫菊栽培組合を設立し、計画的作付、生産価格安定の為の業策、共同販売等の計画を樹てその実践に移ったのである。茲に設立された石狩町除虫菊栽培組合規約を次に掲げる。（大正六年三月創立）

石狩除虫菊栽培組合規約

第壱条　本組合ハ共同一致栽培并ニ種子ノ改良製造等ニ関シ発展ノ道ヲ図リ組合員ノ福利ヲ増進シ地方ノ特産物トシテ汎リ市場ニ販路ヲ拡張スルヲ以テ目的トス

第弐条　本組合ハ石狩町除虫菊栽培組合ト称ス

第三条　本組合ノ区域ハ石狩町管内トス

第四条　本組合ノ事務所ハ組合長ノ住宅ニ置ク

第五条　第一条ノ目的ヲ達スル為メ本組合ニ於テ施行スル事業左ノ如シ

一、優良種苗ノ撰択ヲスル事

二、生産物ヲ共同販売スル事

三、生産ニ要スル物品ヲ共同購入スルコト

四、各種ノ調査及講習、講話、品評会ヲ開催シ適宜表彰スルコト

五、前各号ノ他必要ト認メル事項

第六条　本組合ノ経費ハ組合員ノ負担トス

第七条　本組合ニ加入セントスル者ハ組合長ニ届出デ加入金弐拾銭ヲ提出承認ヲ得ルモノトス

第八条　本組合ハ除虫菊販売高ノ歩合金ヲ徴収シ之ヲ以テ経費并ニ組合事業ノ準備金トス経費ノ剰余金ハ事業準備金トシテ郵便局ニ貯金スルモノトス

第九条　本組合ニ左ノ役員ヲ置ク

組合長　　壱名
副組合長　　壱名
評議員　　八名

第十条　役員ハ組合中ヨリ選挙シ其任期ハ三ケ年トス。再選挙ヲ妨ゲズ、役員ニ当選シタルモノハ正当ノ理由ナクシテ辞任スルコトヲ得ズ補欠選挙ニ依リ就任シタル役員ハ前任者ノ任期ヲ継承ス

役員ハ任期満了後トイエドモ役任者ノ就職スル迄ハ其職務ヲ行フモノトス

第十一条　組合長ハ組合ハ関スル一切ノ事務ヲ掌理シ組合ヲ代表ス。副組合長ハ組合長ヲ補佐シ組合長事故アル時ハ其ノ職務ヲ代理ス

第十二条　評議員ハ組合長ノ諮問ニ応ジ組合重要事務ノ評議ニ関スルモノトス

第十三条　組合役員協議スベキ事項左ノ如シ

一、第五条ノ各項ヲ実行スルトキ
二、生産物検査ノ件
三、生産物運輸ノ件
四、生産物ノ価格決定
五、生産物販売

第十四条　組合ノ役員ハ当分ノ内検査員ヲ兼スルモノトス

第十五条　組合役員ハ組合用務ノ為メ出張スル場合ハ左ノ日当ヲ給スルモノトス

一、管内日当一日一人金　　円
　同　宿泊一泊一人金　　円
一、管外日当一人　金　　円
　同　宿泊一泊　金　　円

第十六条　組合ノ事業ハ一月一日ニ始マリ十二月三十一日ヲ以テ終ル

第十七条　総会ハ通常総会及ビ臨時総会ノ二種トス

一、通常総会ハ毎年一月中ニ之ヲ開ク
二、臨時総会ハ左ノ場合ニ於イテ開ク

1. 組合長ノ必要ト認メル時
2. 組合員三分の一以上ヨリ会議ノ目的及ビ招集事由ヲ示シタル時

第十八条　総会ニ於テ決議ス可キ事項左ノ如シ

一、経費予算及徴収方法

二、経費決算及事務成績ノ認定
三、組合財産ノ管理方法
四、規約ノ変更
五、役員ノ選任及退任
六、業務執行其他重要事項ニ関スル規定制定
七、解散
八、前各号ノ外重要事項

第十九条　総会ハ総組合員中半数以上ノ出席スルニ非ザレバ開会スル事ヲ得ズ総会ノ決議ハ出席シタル組合員過半数ヲ以テ之ヲ為ス役員ノ選任及退任規約ノ変更除名ノ決議ハ四分ノ三以上ノ同意アルコトヲ要ス

第二十条　総会ノ議長ハ組合長之ニ当ル組合長事故アルトキハ副組合長之ニ代ル、副組合長事故アル時ハ評議員互選ヲ以テ之ニ代ル。但シ総会ニ於イテ必要ト認メタルトキハ出席組合員中ヨリ互選スル事ヲ得

第二十一条　本組合総会ニ於テ四分ノ三以上ノ同意ヲ得ルニ非ザレバ解散スル事ヲ得ズ

第二十二条　組合員ニシテ本規約遵守セザルモノハ総会ノ決議ニ依リ除名スルコトアルベシ

第二十三条　組合ヨリ除名セラレ若シクハ脱退シタル者ハ本組合財産ニ対スル権利ヲ失フモノトス、但シ死亡其ノ他総会ニ於テ己ムヲ得ズト認メタル事由ニ依リ脱退シタル者ニ封シテハ脱退当時迄ノ積立金ヲ返還スルモノトス

（註）石狩町除虫菊栽培組合細則は第壱条より第二十五条迄あるも、ここでは煩雑の為省略する。

石狩町除虫菊栽培組合名簿

設立当時及び途中加入者をも含む

親船町ヤウスバ　江口信近、川合鯉一郎、戒屋亀之進
石狩本町　長野徳太郎
花畔村　金子清一郎、田中兼松、織田弥七郎、田口熊次、春木仁保、織田大作、小西与三吉、皆川留吉、小野春松、田口子之蔵、岩瀬嘉七、長谷川新作、林龍三、小柳勝三郎、林新吉、城川栄次郎、舛田岩雄、長井源蔵、高木法恵、長野三四郎、溝渕佐市郎、伊藤幸四郎（後、栄三郎）、吉田常次郎、内海秀太郎、古川角蔵、川上市造、松本興吉、阿部徳平、中村千太郎、斉藤作太郎、釣部捨蔵、加藤重郎、二木員衛、谷藤次、吉田筆吉、皆川吉次、尾田平八、堀政一、春木紋吉、茎津由松、田中清吉、南出亥之吉、横井半吉、佐藤駒蔵、桜井長八、高谷久太郎、今野俊徳、山岸竹次郎、田口興八、阿部友吉、堺忠七、久慈菊次
樽川村　猪俣松蔵、河本荘七、釣本鈴三郎、安田庄槌、越野佐一郎、今井盛蔵、和佐行郷、北清五郎、赤山直吉、山田仙三助、和佐五郎衛門、千歩亀松、米田勝四郎、杉野太吉、藪中庄一、木村幸太郎、鶴田吉蔵、鶴田義晴、前田芳之助（後に芳男）、勝田弥作、宮崎増蔵

生振村　萱野亀松、吉野多蔵、佐藤兵蔵
八幡町　菅池文太郎、西谷市蔵

斯うした除虫菊組合の結成により、前記の計画作付、生産、価格の安定の対処を策し努力の結果、漸次其の成果をあげるに至った。偶々第一次世界大戦争の勃発により除虫菊の原産地オーストリヤ、ハンガリーをはじめ、中欧諸国に於いてその生産が急激に減少し除虫菊の価格が大昂騰を来たしたのと、之に反し一般農産物価が低落した為、当業者の栽培熱を煽り俄かに之を栽培する者が増加し、昭和五年には全道作付反別一万三千町歩、年産額百万貫を越えて世界総生産額二百余万貫の半ばを占め本邦の生産高一六〇余万貫の六割を優に越え、除虫菊は薄荷と並んで北海道が世界の首位を占める大生産地となった。

然し先にも記した如く相場の変動が激しく商社の好餌となり、青田売りならぬ白い花盛りの白田売りといわれ、冬のうちから手付金がバラまかれ投機的に取扱はれた。即ち生産乾花の商権は悉く大阪、神戸の商人の独占する処でありその価格の如きも二、三商人利益の為、多数生産者が犠牲になり又加工方面より見ても原料産地の本道が逆輸入に甘んじている実状である為、工業組合法に基づく団体を結成し除虫菊の加工製品工場の設置は各方面からも要望されていたが、上川郡和寒村松本六太郎、同舟橋要、石狩町花畔村金子清一郎、虻田郡倶知安町関口憲治郎、空知郡栗沢村小林豊吉の諸氏が代表となり、左の決議書を提げ道庁の内藤産業部長を訪ね種々陳情を重ね、了解を得る処あった。

陳　情　書

一、本道除虫菊生産並に加工の向上発展を期するには消費地の実情調査を為すは基本的方法と思惟す。依って生産者及び加工者代表並に官庁選定の化学者各一名宛を海外に派遣し消流状態加工方法の調査を為し帰来、是等の意見を基礎として本道斯界の根本方策を樹立し並に其調査費は拓殖費より支弁せらるること。

二、前項の調査により基礎案を得たる時期に於いて生産と加工を統制し得る一大有力会社を設立し生産に於ては道内生産の七割を買収して世界除虫菊の価格調節を為し加工に於いては道内各加工業を合同包含して原料生産地独得の製品を造り両々相挨って生産地たる本道の位置を永久のものたらしむること。

その後昭和七年十二月二十日北海道除虫菊製品工業組合の設立が認可され、前記代表者等が十二万五千円の共同出資を以て琴似駅附近に工場敷地を求め建設に着工した。

設立登記された当時の新聞北海タイムス（北海道新聞の前身）に次の記事が掲載されている。

工業組合設立

一、名　称　北海道除虫菊製品工業組合

一、事務所　札幌市南九条西八丁目四一七番地
一、目　的　除虫菊製品工業ノ改良発達ヲ図ル為共同ノ施設ヲ為ス
一、地　区　北海道一円
一、出　資　一口金額二千五百円
一、出資払込方法　第一回払込金額ハ一口ニ付金六百二十五円トシ、第二回以後ノ払込ハ配当スベキ剰余途中ヨリ払込ニ充ツタ外総会ノ議決ヲ以テ必要ニ応ジ払込マシム
一、出資ノ総口数　二百口
一、出資払込総額　金十二萬五千円
一、保証金額及組合員、氏名、住所
金十萬円　北辰薬草栽培株式会社　虻田郡倶知安町基線西四十番地　関口憲治郎
金十萬円　北海道除虫菊加工株式会社　空知郡栗沢村字清真布七百五十番地ノ十　小林豊吉
金十萬円　共和除虫菊加工合資会社　上川郡和寒村字和寒市街地八百三番地　舟橋　要
金十萬円　石狩町除虫菊栽培組合　石狩郡石狩町字花畔村三十八番地　金子清一郎
金十萬円　岩内郡小澤村字元村　河村常三郎
一、設立認可年月日　昭和七年十二月二十日
一、理事　氏名　住所
関工憲治郎　虻田郡倶知安町基線西四十番地
小林　豊吉　空知郡栗沢村字清真布七百五十番地ノ十
舟橋　要　上川郡和寒村字和寒市街地
一、監事　氏名　住所
志田　弥助　空知郡幌向村南十二号線西二号
金子清一郎　石狩郡石狩町大字花畔村三十八番地
右昭和八年四月十日登記

琴似駅前に建設された除虫菊製品工場は直ちに操業をはじめた。

元来除虫菊乾花を外国に輸出する際、その有効成分は一、二ヶ月の間に約二割五分という急激な損耗を示すものであって、之を本道で採取後直ちにエキス製品とする事によって斯かる損失は全然之を防ぐ事を得る訳であり、又除虫菊の成分ピレトリンの毒作用は主として之が虫体に接触する時その気孔より体に浸入して筋肉を麻痺せしめ死に至らしめるものであり、組合は濃厚エキス「ピレトシツキス」農業用乳剤及び家庭用スプレーは共に「ハルク」の名称で広く道内外をはじめ海外にも販路を拡げた。然し一般家庭、農家の翹望する処ではあるが、近年稀有の原料高は勢い販売価格の高騰となり又此の種製剤の新しい関係上一般に製品に対する認識に乏しく予期の売行きを示さなかった。土地、家屋を抵当に借金をし、組合設立に奔走した父も家庭的にも経済的にも一大危機に瀕したのであった。

その後製品の普及に全力を尽した結果、徐々にその成

果を揚げた。

一方除虫菊乾花の生産量は更に延び、昭和十年乾花生産量一四五万貫、昭和十二年の乾花出廻り、一二二万貫、その六割以上を北聯が集荷の状況にあった。

昭和十四年二月北聯は北海道除虫菊製品工業組合所有の琴似工場（工場三棟、倉庫一棟等）五〇〇坪を買収し操業、外に多度志、和寒、倶知安の倉庫三棟、四五〇坪を接収し、一方乾花を一元的に集荷し乾花のまま輸出、軍部への納入、阪神業者への供給を果した。

昭和十六年から乳剤と粉剤を製造、認識の昂揚と其の効果の顕著さに需要に応じ切れない呈であったが、昭和十八年四月同工場は失火し全焼した。

之より先、日支事変に続いて昭和十六年十二月大東亜戦争の勃発となり、戦争遂行の為要綱統制により石狩町除虫菊栽培組合も昭和十七年産業組合に統合され、大正六年に組合設立以来二十六年の歴史を閉じたのである。

昭和十七年六月十四日花川国民学校に於て午前十時より解散式を挙行、組合功労者に感謝状並に記念品が贈呈された。

金百円並に金側懐中時計、組合長　金子清一郎
金三十五円　副組合長　阿部秀雄
金二十五円　評議員　内海秀太郎
金二十円　評議員　田中兼松、川合鯉一郎
金十円　評議員　故猪俣松蔵
金五円　評議員　林　新吉、越野佐一郎
皆川留吉　米田勝四郎

石狩町に於ける生産、販売高

石狩町除虫菊栽培組合の資料によると、石狩町に於ける除虫菊生産高及販売金額は次の通りである。

大正	六年	九一〇貫二三五匁	二千三一一円四七銭二
〃	七年	一、二七四・〇〇〇	二、五四八・三〇
〃	八年	六五一・〇〇〇	二、八一一・六二
〃	九年	六六二・九〇〇	六、三八四・一四
〃	一〇年	六一七・二二〇	二、九六二・六五・六
〃	一一年	九七九・三〇〇	五、六一三・五七・一
〃	一二年		六、〇〇九・三三
〃	一三年	一、三二二・五〇〇	七、二七三・七五
大正	一四年	三、二八九貫六〇〇匁	八千七一七円四四銭
〃	一五年	四、二〇二・八五〇	五、一三三・〇三・五
昭和	二年	二、三四二・九〇〇	五、七三三・六六
〃	三年	一、六一七・三五〇	七、三三三・三三
〃	四年	二、三七七・九八〇	六、九一一・八二
〃	五年	二、九四二・五〇〇	五、八〇五・〇五
〃	六年	二、一三五・六〇〇	三、三九五・八四
〃	七年	一、二七九・七〇〇	三、六〇二・八五
〃	八年	一、五四八・一〇〇	七、八八〇・六〇
〃	九年	一、三八一・三〇〇	七、〇九五・四〇

〃 一〇年	二、三三七・九〇〇	四、八二五・五三
〃 一一年	一、一四四・八〇〇	二、三〇九・五〇
〃 一二年	一、二三九・四〇〇	三、七九五・四八
〃 一三年	一、四一九・四〇〇	六、七五〇・二七
〃 一四年	一、四二七・六五〇	一一、〇八〇・九三
〃 一五年	一、一三七・七〇〇	七、一八七・八三
〃 一六年		
〃 一七年	昭和十七年六月十四日	
	石狩町除虫菊栽培組合解散	

昭和五年花畔土功組合が設立され、造田計画の実施によって、畑作から漸次稲作に切換へられて除虫菊の作付面積減少、大東亜戦争の最中から終戦後にかけては最も食糧に苦しんでいた時代なので殆ど食糧作物に切り換へられて戦後の昭和二十五、六年頃は花畔の一部で作付けされていた程度であった様に記憶している。

私も此の除虫菊が私の祖父によって北海道に始めて作られたという創生の歴史がある為どんな事があっても之を絶やすまいと努力して来たが、戦後アメリカからD・D・Tの様な非常によい薬がどんどん輸入されるに及んで除虫菊の需要激減、割高の除虫菊剤では対抗出来なくなり、世界に生産を誇った本道の除虫菊もすっかり影をひそめ最後迄生産を続けてゐた石狩町の除虫菊も昭和三十五年頃を最後にあの真白い清楚な姿を全く消してしまった。私も残念ながら時代の波には抗し切れず、先祖に申し訳ないと思い乍らも遂に除虫菊の作付を断念した。之は昭和三十五年頃の事で恐らく北海道の除虫菊栽培をやめたのも私が最後でなかったかと思うとさびしい気持がぬぐい切れない。

今私の庭に十株ほどの除虫菊があり、毎年七月頃になると真白い清楚な花を咲かせている。

◎参考文献

丹野獄二著「北海道の除虫菊」
石狩町除虫菊栽培組合の記録綴り
北海道除虫菊調査会「除虫菊の指針」

尚、数々の褒状、感謝状が授与されているのでその一部をあげて見よう。出品物は、除虫菊乾花、又は除虫菊粉末が主である。

一、感謝状　明治三十七年十一月十五日
北海道果実品評会　農学博士　南　鷹次郎
一、褒　状　明治三十九年九月二十六日
北海道物産共進会　北海道庁長官　園田　安賢
一、賞　状　明治四十二年十月十九日
蔬菜果実品評会　北海道庁長官　河島　醇
一、感謝状　大正二年八月二十五日
北海道衛生展覧会　北海道庁長官　中村純九郎
一、褒　状　大正四年八月十八日

北海道衛生展覧会　北海道庁長官　俵　孫一
一、褒　状　大正九年九月三十日
石狩、厚田、浜益、三郡併合物産共進会
北海道庁長官　笠井　信一
一、彰功状　（名誉金牌）　大正十一年七月十五日
平和記念東京博覧会帝国実業奨励会総裁
長岡　長吉
一、記念状　大正十三年五月五日
東宮殿下御成婚奉祝萬国博覧会参加五十年記念博覧会
総　裁　博　恭　王
一、彰功状　（名誉　賞金牌）　昭和二年二月八日
昭和改元朝見式勅語御下賜記念優良国産品　査会
総　裁　内藤　政潔
一、優良国産賞　昭和六年八月十五日
北海道拓殖博覧会　北海道庁長官　池田　秀雄
一、優良国産賞　昭和十年四月
国防と産業大博覧会　名誉総裁　浅野　長勲
一、感謝状　昭和十二年八月二十五日
北海道大博覧会　北海道庁長官　石黒　英彦

早坂文雄をしのぶ

前川道寛

わたしが北海中学（現北海高校）を卒業したのは、昭和七年のことであった。いつの間にか半世紀が過ぎた。藪の中から猛者が出ると唄った母校も、今は街の中になってしまった。この年、石狩から北中に入ったのは四人であったが、現存しているのは私と医者になった鈴木繁次郎君だけだ。

時の流れは、クラスの仲間を減していった。

この前のクラス会の折、札崎了介君（元北方領土返還事務局長）が「同級生の中で、一番よい仕事を残したのは、早坂ではないか、彼の想い出を書いて置くとよいなあ」とわたしに語ったが、その彼も過去の人になってしまった。

早坂は作曲家早坂文雄君のことである。彼は在校中は余り目立った存在ではなかった。只だ中学二年か、三年のとき彼がハーモニカで全国優勝をしたことがあった。その折、学校では全校生徒を運動場に集め、彼のハーモニカーを聞かしてくれた。

当時、ハーモニカーは一般的に流行していた。仲間で一番音痴と言われた、わたしでもハトポッポと君が代位は吹いたものであった。

ともかく、彼の素晴らしい音色は一同を陶然とさせたものであった。今のようにテレビなぞない時代故、その感動は一層強かったと思う。その時の印象だけは、今でもはっきり残っている。

在校時代一度だけ、彼の自宅を訪問したことがあった当時私たしは、南四条西十丁目の同級生斉藤正雄（後、道警学校教官）の家に同居していた。このときも、斉藤君に誘はれて、早坂君の家に行った。確か四年生位の時と思う。

彼の家は、斉藤君の家より余り遠くはなかった。彼の部屋は北窓に面し、窓辺は道路になっていた。木造式の簡単なもの、床は高くないので、彼は窓辺に腰をかけ、外からのぞきながら話ができた。話の内容は特に記憶に残っていない。直接会っての話はその位と言えよう。

昭和十七年、わたしが再度の召集で樺太の自動車部隊に居たとき、後からの召集兵で、大島と言うのが入ってきた。彼は一風変った存在で、寝小便をするというので鶏小屋に勤務をしていた（当時、軍隊でも食糧難で、原野を開墾して、野菜作りや養鶏をやっていた）

彼は東宝映画で働いていたということで、早坂のことをよく知っていた。「早坂は肺ですよ」と教えてくれた。今ならガンというところでしょう。早坂の立派な働きは、彼からいろいろ聞いたが、音楽的知識のない私には、特に覚えているものはない。大島の画伯とか、誰か言っていた。

戦後、何年頃であったか、ＮＨＫで名士の年頭挨拶が放送されたことがあったが、そのとき、早坂が話をしていた。彼は有名人になったなあと思ったが、この時が彼の最後の声となった。

昭和三十年秋、彼は亡くなった。生前彼と親交のあった同級生の坪松一郎君が江別小学校の校歌を作詞して、それを早坂が作曲したというので話題になり新聞に戴ったことがあった。

その坪松君から昭和四十二年のこと一通のハガキがきた。彼と私は中学時代は気の合った仲であったが、卒業後はこの時まで文通も途絶えていた。

その中に「先日早坂文雄君の追悼音楽会をやりました。歌志内町の坊さん相川君（同期）や菅原（同期）にも会いました。みんな年とっています。ボクも同じようです」以下略　この時、坪松君は江別市豊幌小学校の校長となっている（童謡詩人）彼なら早坂君の想い出を書くに適しているが、彼も肺結核で四十四年春、他界している。

早坂の想い出と言って、同級生の何人かをたずねてみたが音楽の素養のないものには反応は少ない。

こんなおりに「石狩俳壇誌」出版の節大変御世話になった北海道教育出版社、現社長倉島義象氏の御尊父倉島義昌さんが昔、小学校の教師で、最初に勤務されたところが当別小学校で、偶然にも早坂文雄君と一緒であった

ことが判った。

倉島先生は師範出身で、音楽の素地もあったので、早坂君にとって話し易い先輩同僚であったようです。そのため倉島先生のお話は早坂君を知る上で大変参考になると思う。

因に倉島先生は大正六年生まれ、早坂君は大正三年生まれだが、当別小学校の職場では倉島先生が先輩となっている。

これからは先生のお話である。

昭和十三年頃であったと思う。早坂先生は札幌光星商業（現、光星高校）の校長さんと喧嘩して、学校を止めてきたという。

最初の登校日のこと、自分達は二教室続きの部屋で、ピンポン（卓球）をしていた。その最中メガネをかけた頭の髪は肩まで延した変った人がやってきた。校長に早坂文雄と紹介された。作曲の天才とは誰も知らずにいた。それから二、三日目にワインガルトナー賞（ドイツ）。入賞という記事が新聞に載った。日本人で初めての賞であった。それから急に早坂の名声が上った。校長は変な者を連れてきたと皆が思っていたがこれで校長も鼻を高くしたようだった。

富貴堂（書店）や札鉄などから誘いにきたが、早坂は僕に言った。「僕は小学校の先生になる。気分もよいからこゝに居る。代用教員の資格で入ってきたので、これから試験を受け、本資格を取りたい。」国語、算数等、私も心理学と教育学の本を貸した。その間、アチコチから作曲を頼みにきたようだ。作曲して送ると謝礼がくる。

職員会議の最中、皆が激論をたゝかわしているとき、私の机の上に紙ヒコーキがとんどきた。見ると為替であった。作曲代が入ったなと思う。会議の方は詰らなそうであった。いつもすり切れた服を着ていた。本人は困ったとは言わないが、普段金のないのは分っていた。

こんなことがあった。彼は御馳走するからと私を連れてお店に行き最中一ケを買ってきた。彼の財布はそれで空（カラ）になったなあと思った。それでも平気で、その半分を私に食べれと言ってよこした。

「なんでもない話のようだが、倉島先生のこのお話は強く私の胸を打つものがあった。早坂が中学一年の時、学校文芸誌に、

病むという異郷の友や暮の春

という一句を載せていた。又坪松に頼まれて、校歌を作曲していることなぞ併せて、考えると彼らしい人間味をのぞかせていると思ったからだ。」

先生は更に言葉を続けられる。学校にドイツ製のオルガンがあった。それは古くなりリードも二、三枚欠損し、使いものにならないので、物置にほうり込まれて、埃りまみれになっていた。彼は校長の許可を得てそれを自宅（教員住宅）に運び、それを唯一の楽器として、作曲に

取り組んでいた。

彼がワインガルトナー賞、受賞の記念演奏会を札幌交響楽団が催すに当って、交響曲「雪国に寄する」を作曲したのは、この田舎の教員住宅で壊れたオルガンでメロデーや和音を探りながら続けられたからだ。この曲のモチーフは「江差追分」であった。江別在住の「追分」の名人といわれた今井篁山氏にいろいろ示唆を受けたりもした。

彼はこの演奏会で、主役として挨拶の他に、テンパニーを打つことになっていた。週に何回か、バチを小脇きに、汽車で通っていた。

或る時、札幌駅前の西村喫茶店で、二時間程、話合いをしたことがあった。その時、彼の音楽論を聞いた。

早坂は「民族音楽」を叫んだ。現在の音楽は輸入ものだ。その頃、三味線は馬鹿にされていた。「笙しちりき」を通した楽譜、田舎の太鼓の中に日本独自の音楽がある。

西洋では全音、半音が基本である。ドレミファ　半音。日本の四分の三音とか、六分の五音とか、そういう西洋にない音階がある。

日本では、学問的に体系づけられたものがない。伝授しかない。これを西洋の音楽に匹敵するよう体系づけなければならない。

ピアノ、オルガンと言った楽器は使われてはいるが、それらを変えてしまわなければならない。僕の一生ではできない。以上が西村店での話でした。

彼に学芸会の伴奏を頼むと、他の先生は一生懸命練習するが、彼は一回も練習をしないで、いきなり楽譜を見て弾いた。それでいて児童の唄い易いように弾ける。不思議に思って先生に尋ねた。どうして一回見ただけで弾けるのですか、すると先生はどうしてと言って、曲というものは、そうすれば、こうなるようにできているものだと答えられた。

まさに彼は天才だった。

昭和十四年であったか、彼に召集令状がきた。バンザイ、バンザイで送る。長い髪の毛を丸坊主にしていった。

それから一週間して、戻ってきた。突然のことで吃驚した。〝お前は軍隊に来るよりお国に居て、音楽をした方がよい〟と帰されてきたと笑っていた。この時、肺結核であったのである。

その後、暫らくして、今度東京に行く、東宝で、森田たま（札幌出身　随筆家、小説家、参議員）の「リボンを結ぶ少女」を映画化するに、作者は早坂が作曲するのでなければＯＫしないという。

こうして、森田さんに口説かれて、東宝に行くことになった。

「年間二本か三本、映画音楽を作曲すればよいことになっているので、余暇に正規の作曲学を勉強したい。」と言うのである。私はこのとき、早坂先生に止めなさい

と言った。年に二、三本というのが、相手は営利会社だ。無理に作曲させられて、先生の体が駄目になるような気がする、と言うと彼はそれはわかるが、僕は正規の勉強をしていない、今ドイツからよい先生が東京に来ている。その先生について、本当の音楽を勉強したい。そのため、東京に行く。二、三年したら帰ってくるよ。

昭和十五年の春か、東京に家族ぐるみで行った。

その後、東京に出張した先生が会ってきたという話は聞いたが、私は会うことはなかった。

これまでが倉島先生のお話であったが、先生からならでは聞くことのできない早坂君を知る上での貴重なものであったと思う。先生の記憶力のよいのにも敬服した。

早坂君はその後、黒沢監督の「羅生門」（グランプリ作品）、「七人の侍」などの映画音楽を担当、幾多の傑作を創り、日本の映画音楽の向上に大きな力を尽した。

昭和三十年十月十五日、この天才は亡くなったが、彼の功績は不滅であろう。

◎追　記

文中、江別小学校の校歌を作曲したと言うのは私の記憶違いで、江別二中と江別三中の校歌を坪松一郎作詞、早坂文雄作曲でやっていたことが判った。

尚、最近札幌白石北郷に住む、中学時代の同期、青柳君から電話がきて、早坂について興味ある話を聞いた。

それは中学一、二年の頃だが早坂と知り合って、映画の招待券をやっていたという話である。

「わたしの家は昔から楽局であった。近所に南部忠平さんのお姉さんが住んでいて、いつもわたしの店に来てくれ親しくしていた。その姉さんの実家は三国屋であるが、その兄は「美満寿館」（場所は南四条西五丁目角）という、当時一流の映画館を経営していた。そんな関係で、わたしは招待券をいつも貰っていた。そしてそれを早坂に渡していた。早坂はとても喜んで観に行っていた。その喜ぶ彼を見ていると又自然にくれたくなって渡したものです」と。青柳君のこの友情は中学を卒業しても続いていたと言う。

当時はテレビは勿論、ラジオさえ各家庭では充分に聞くことのできなかった時代である。

早坂君の家も余り楽な家庭とは言えなかった時代に一流の映画館で彼の好きな音楽が聞けたのは大きな喜びであったに違いない。

そればかりか、彼が後世映画音楽で名声を挙げるようになった要因の一つにもなったような気がわたしにはする。

特別寄稿

一九四五年七月十五日
石狩空襲の思い出

中村秋雄

昭和二十年七月十五日。其の日は日曜日。朝から抜けるような青空とはいえないが、七月としては過ごしやすい天気でした。

私は午前七時過ぎ八幡町の集乳所より脱脂乳をもらい子牛に飲ませていた。と突然頭上を敵艦載機グラマン八機が室蘭沖より飛来。石狩上空を小樽へ向かう途中、花畔あたりで放牧の牛に機銃掃射をし、小樽を空襲攻撃するため飛び去った。

前日の十四日。室蘭・襟裳岬・釧路の海岸線に艦砲射撃や艦載機グラマンによる攻撃を受けたニュースなど聞いていたので、いよいよ日本海側にも来たかと身の引き締まる思いだった。しかし、まさか石狩が空襲を受けるとは夢にも考えなかった。

朝から石狩にも空襲警報が出されていたので妻に（此の年の四月三十日結婚）食料を防空壕に入れて待避させておき、私は農業会の常直でしたので万一に備え身支度を整え双眼鏡をもって農業会の二階屋根上にて小樽方面の敵機を、監視していた。

当時私も妻も石狩町農業会に勤務（現在の農協の前身）して居ました。当日の日直は昭和六十一年に亡くなりました柴田広之氏で彼も詳しく見た一人でした。

小樽は軍艦一隻砲艦一隻が居たそうで、又市内は煙幕を張り巡らして無事だったようですが砲艦一隻が沈没し敵機も一機撃墜したとの事は後で聞きました。当日石狩の機帆船も何隻か小樽に行って居たのが、空襲の最中逃げて来たのには驚ろいた。

小樽に昼過ぎ二機程度敵の援軍が飛来し、総数八～九機で三時ごろ迄小樽を空爆し、そのあと石狩沖を素通りして知津狩浜の石油採集の「やぐら」（現在の塵介焼却処所付近）を爆撃して望来から厚田と食糧の倉庫群を、おもに爆撃と機銃の掃射を加えて。小樽方面に向かうかに見えた。ところが突然石狩湾より機首を石狩に転じあっと思う間もなく、灯台の付近の井上さんの牛めがけ機関銃を掃射した。その音に驚いて農業会の屋根から転げるように下りると石山右一氏が居た（現在の石山町議の祖父）の防空壕に入らないと危ないと二人で壕に入った。壕の中は近所の人でいっぱいで蜂の巣のようで、二重扉の中までは入る事が出来ない。

敵機による波状攻撃で壕の中は爆弾の落ちる度に砂がバラバラと落ちてくる、機関銃の弾がブスブスと地上に突きさゝる音に子供が泣くと、声を出すと敵に聞こえる

と怒る人も居れば、お念仏を唱える人もいる。敵の爆撃と機関銃の掃射で命の縮む思いでいた時に、外側の扉の角に機銃の弾が当り二メートルほど扉がふき飛ばされてしまい敵機に丸見えでした。電線すれすれに飛行士もはっきりと見える低空で飛び回り傍若無人に有るだけの爆弾を投下し機関銃の乱射で雨あられのごとく、それは物凄く外に出て反撃も出来ない我々に、敵は傍若無人の襲撃である。

石狩上空を何回か旋回爆撃して敵が去るまでの時間は定かではないが四十五分くらいの事ではないかと思います。誰かの「敵機が去ったぞー」の声に防空壕より飛び出してみてびっくり、関多一さん、管池豊作さんの家が直撃弾を受けてつぶれ、火を噴いており防空演習で練習したバケツリレーで消火し振りかえると、北原正美さんの三階建の家が焼夷弾にて炎に包まれていた。農業会の向かいの石井さんの横に消防の腕用ポンプが有るのを農業会味噌醤油醸造工場の廣木さんと精米工場の山本さんの二人で引っ張り私がホースを巻いた巻き車を引き、松木食堂さんの狭い横通りを通り石狩川までいき、いざ放水となったが、ホースの筒先が廣木さん、ホースの中間に山本さんがつきましたがポンプを押すのに私一人では子供の小便ほども出ない。

火事の方は北原さんは大半焼け右隣りの尾崎さんと左隣の岩渕馬具店に類焼してしまいました。そのうちにあちらこちらから人が集まり、また来札から腕用一台の応援があり本格的に消火が出来た時には松木さんの処で消し止めたいと必死でした。しかし、火勢が強く乾燥しきった時期だけに駄目でした。隣の平賀さん迄は三メートル以上の間隔があったと思われた処へたちまち燃え移り手の付ける事も出来ない。

其のうちに向かいの伊藤丸八理髪店の屋根にも飛び火、そこは手送りバケツリレーにより消火、こちらは平賀さんと隣の富木さんの間が三十センチ程しかないのです。

其の頃は誰が何処でなど一切わからず皆必死で消火に当っていました。其の甲斐が有り富木さんの壁板を焦がした程度で消火に成功、鎮火したのは陽もしづみ人々の泥や煙りで真黒な顔がようやく見分け付く頃でした。

あゝ、助かったと皆で抱きあって泣いたものです。消火中に、本町の火事で船舶用燃料油のドラム缶に火が入りドカーンと爆発音がする度にまた空襲だと川の中で水に潜ることも度々でした。

丸八床屋のトメさんが「丸八が助かった」と言い川の中にペタンと座り込み泣いたのがいまだに目にうかぶ。ご主人が戦地に行き留守中の時であり無理の無いことと思う。

消火が終わり我に返り、家に帰り愛妻と無事を喜び合う間もなく、消防分団長の関多一さんの遺体が直撃弾により倒壊した家の中より発見されたとの知らせや、隣の

佐藤さんの息子さんの死亡の知らせに、あ然としているさなかに農業会の専務理事筒井豊次郎さんが腹部に爆弾の破片による重傷との知らせを私の同僚の武田吉平氏（故人）が額に傷をうけながら知らせに来たものの上の空である。

日もたっぷり暮れ、あたりを見回すと目も当てられぬ悲惨な惨状でした。農業会の建物は無事であるがガラスは一枚もなく割れてしまい電気も断線で点灯せず、町の中には人の姿もなかった。防空壕にも入る気にもなれず妻と二人で布団とお鉢のご飯を持って野宿し、朝起きて見ると毛虫のいっぱい居る中に寝ていたのでびっくりして逃げ出した。翌日十六日も良い天気で町の中を見て回ると屋根の上や電線の垂れ下がった処に布団のぼろぼろになったのや、着物の切れ端しが引っ掛かり、まるで戦争映画を見ているようでした。

暫くは虚脱状態のまゝそこ此を歩いているだけでした。爆弾の直撃以外の家々は倒壊を免れたものゝ、大なり小なり破損してガラス等一枚も無い。又、農業会の事務所から店舗の中は、ガラスの破片で二センチ程の厚さになり足の踏み場もない有り様でした。

専務の筒井さんは昨夜の内に亡くなられ私ども職員ばかりでなく、石狩町農民が敬愛していた方だけに大きな衝撃でした。

筒井さんはこの日札幌で会議の後、石狩町で馬鈴薯の供出割当会議が招集されていたので一時頃迄に役場に来ていた。武田氏も其の会議に出席したが、空襲警報下の為会議は中止になりました。其の帰途に被災されただけにもう少し中止が速ければと残念でした。若生町では角井さんの奥さんが空襲の最中に子供の防空頭巾を忘れ壕から家に取りに入る処を敵機に見られ家は機関銃の集中砲火で、蜂の巣のようになり勿論奥さんも機銃の弾で重傷をうけ石狩病院にて亡くなられました。

この空襲で防空壕に入った人で死亡した人が居ないのがせめてもの救いでした。亡くなられた関・消防分団長は最後迄町民に防空壕に入るようにと、町中を走り回り自分は壕に入る暇がなく、やむなく家に飛び込んだものです。専務の筒井さんも消防に籍があった事から火の手が上がるのを見て消火の為に消防番屋に走り爆弾の破片を腹部に受けて戦災死された。いずれも殉職ながら町が壊滅的打撃を受けた事と八月十五日の無条件降伏による敗戦の中で町当局が此の事には何をもって報いたかは不明。

石狩町が三十～四十五分の長い間空襲されたのは能量寺の飯尾円什氏（後の町長）の建設にかゝる幻の海辺ホテルが（鉄筋コンクリートの一部三階建）石狩浜にあり。此の建物を利用して空襲のあった翌日の七月十六日沿岸警備隊が守備に付く為、高岡の光明寺に在郷軍人・青年学校生徒等が集結し訓練して居た事を敵は知っていて此

の建物を壊滅する迄石狩上空を旋回し爆撃と銃撃を繰り返したものと思われる。

石狩町に飛来した艦載機は八～九機です。八幡町に落とされた爆弾は、尾崎歯科前に二発（長さ二メートル近いもの）この二発とも爆弾の尻のところが破裂でなく、裂けたと言うようなぶざまな形で転がっていました。信教寺横の一発はあまり大きな物ではないと思われる。農産物検査所裏の二発は（尾崎前と同じ程度のもの）これは農業会の倉庫の屋根を突き抜けサンパ（磯舟の大きな物）を付き抜いて爆弾の尻の所がこれも裂けただけでした。

関さんの直撃弾は五十～百キロ程度のようです。北原さんの所は焼夷弾であろう。家が破壊されず瞬時に燃え上がった石狩にはめづらしい三階建の家でしたので無風でよかったがずいぶん高い火の手が上がり驚きました。農業会の右隣の堀江さんの間に倉庫があり、その中に農家に配給の軽油がドラム缶で五～六十本入れてあり、一時はどうしようかと冷や汗三斗の思いをし後日夢に見たのもつい昨日のように思い出す。

本町の方も役場に直撃と、すぐ前の役場の防空壕の入り口に一発、能量寺の墓地付近に数発、吉岡さんの玄関前のコンクリートの上に不発弾が転がっていたのも空襲の思い出です。横町の一画が箒で掃いたように、地束石だけ残っていたのも凄惨な光景で背筋に冷たいものが走る思いがして、足早に通り過ぎたものです。

町役場に焼夷弾だろうか直撃炎上丸焼けとなり庁舎前の防空壕の入口近くに爆弾が落ちたが、中に居た人は無事であったと聞き改めて壕の威力を知らされたものです。

現在の役場庁舎は其の時仮庁舎として八幡町榎本建設の先代榎本新造氏の手により建設、そのあと何回か増設された。ことわざにある「仮末代」の見本のようなものである。

爆弾の落ちた跡で一番大きく感じられたのは現在の石狩大橋のヤウスバ側の取り付け付近から、運河橋の近くの河川敷地に落下した二発だろう。すり鉢型の穴の上部が直径が三、四十メートル以上にも感じられたものです。後に水がたまり魚釣りをしていた人が居たのが、今でも脳裏に鮮やかに浮かぶのも、その大きさが強烈に感じられたからであろう。

世界第二次大戦の終戦一ヶ月前の昭和二十年七月十五日にアメリカ軍の艦載機グラマンにより空襲を受けた体験を思い出として綴って見ました。

戦後四十三年も過ぎると鮮明には思いだせない事が多いが、空襲の最中には、恐ろしさよりも生きる事のみに無我夢中と言うのが本音であった。

実際には、まだまだ残酷であり恐ろしく、口惜しい思いであったはずなのに、何か楽しい思い出を綴るようなのは何故だろう。長い年月による心の風化であろうか。

何か物足りない思いもする記録であるが、戦争を知らない世代の人々に、その恐ろしさが少しでも理解していただきたいと思う次第である。

今では何も無かったような、静かなわが町石狩にもこの様な戦争の悲劇があった事を、後世に伝える事が出来れば幸いです。

戦災で死亡された方々の御冥福を心からお祈申し上げると共に、今、平和の中に暮らす事のできる我々は、この大戦に於て、お国の為にとの大義名分??のもとに沢山の尊い同胞の犠牲の上に成り立っている事を忘れてはならないと肝に命じて再びこの様な愚かな事を起こさない為の一助にもなればと思い筆を取りました。

つたない文ですが判読戴ければ幸いです。

一九八八年　昭和六十三年七月改定

中　村　秋　雄　六十七才　手記

（当時の住所）八幡町字来札一一九

「農業会館内」

いしかり暦　第七号
昭和六三年九月二五日　印刷
昭和六三年九月三〇日　発行
発行者　石狩町郷土研究会
石狩町花川北四条二丁目一五〇
山口福司方